

博士論文概要

体育授業と教室授業における他者との協調的スキル

大学院教育発達科学研究科

心理発達科学専攻 運動学習科学講座

博士後期課程3年 加納 岳拓

指導教員 山本 裕二

緒言

個人および社会全体のウェルビーイングに向けた教育が目指される今、複数で課題を共有し、他者と相互作用しながら新たな課題の発見や課題の解決ができる力を指す他者との協調的スキルが、様々な研究領域で検討されてきた。

他者との協調的スキルは、個々の「課題（目的）に対して注意を向ける」、自分自身と事物との関係と自分自身と他者との関係を統合し、他者とある目的の達成に向けて知覚を共有している状態である「課題を共有するスキル」、そして課題を共有した上で他者との意図の共有によって生じる行為を調整する「他者と協調するスキル」という階層性がある。そして、他者との協調には、言語を中心とした認知的側面の基盤として、視知覚や感覚運動を生み出す身体が重要となる。これまで身体運動による他者との関係に対する効果は示されているものの、体育授業と教室授業という活動場が違う中で、他者との協調的スキルに関わる行為の共通性については解明されていない。

そこで、体育授業において連携が必要な鬼遊びと教室授業において対話が必要な算数授業中の行為を分析し、他者と協調するスキルの共通性を検討することで、他者と協調するという汎用的なスキルを体育授業の身体運動によって育成する可能性を見出すこととした。

方法

- 1) 入学直後の小学校1年生を対象とし、算数授業中の個人活動、全体発表、先生の話の5場面を抽出して、各場面における視線と座位姿勢を、録画したビデオから分析し、課題に注意を向ける行動指標を検討した。
- 2) 小学校1年生を対象に、体育授業における攻撃3人対守備者2人の鬼遊びにおけるゲームの失点と、教室授業での認知的課題における聴く行為を分析し、他者と課題を共有するスキルの共通性を検証した。

- 3) 小学校3年生を対象に、体育授業では2)と同様の鬼遊びにおける守備者の動きに着目し、個人の指標として各守備者の動きの効率性を、ペアの指標として守備者2人の二者間距離を分析した。教室授業では、ペア活動中の話し手と聴き手の行為を観察し、個人の行為として話し手と聴き手時の応答的態度を分析した。また、ペア活動中の役割交替をペアの行為として分析した。

- 4) 小学校3年生のバスケットボールを対象として、他者との協調的スキルを育成する体育科の単元展開試案を提示した。

結果

- 1) 児童の行動そのものに直接介入するのではなく、課題へ引き込まれる場面の設定によって児童の視線や姿勢の安定が引き出されること、視線と姿勢が児童それぞれの認知的課題に対して注意を向ける力を測る行動指標となることが示唆された。
- 2) 鬼遊びの失点の少なさと児童の視線の方向と座位姿勢の安定との間には有意な正の相関が認められ、他者と課題を共有するスキルは、身体的課題と認知的課題の性質にかかわらず共通していた。
- 3) 鬼遊びにおける個人の動きの効率性とペアの二者間距離、認知的課題における個人の応答的態度とペアの役割交替の頻度の間に正の相関が認められた。さらに、課題間における個人とペアの行動の双方に有意な相関関係が見られた。つまり、二者で他者と意図を共有して協調するスキルは、身体的課題と認知的課題の性質の違いにかかわらず共通していた。
- 4) チームや対戦相手を固定し、「ゴール下を中心としたショット空間をめぐる攻防」に勝つために特定の戦術パターンを獲得、強化していく展開ではなく、毎時間チームや対戦相手が替わる不安定な環境の中で、目的に向けて常にその場での最適な行為を探る必要性

がある単元展開試案を提出した。

結論

他者との協調のはじまりとなる課題に対する注意が、認知的課題の中で視線および姿勢という身体に表れること、そして、他者と課題を共有するために、課題に注意を向ける他者を「見る」「聴く」スキルと、他者と協調するために「相手に応じる」「役割を切り替える」スキルが身体的課題と認知的課題に共通して見られるこ

とが明らかとなった。また、多様な他者と柔軟に協調するスキルを高めるために、自己のあり方が固定化しない多様な環境での身体運動が必要である。

総じて、小学校1年生から高校3年生まで唯一の必修教科である体育科が、人間特有とされる他者との協調的スキルの育成に向けて重要な機能を果たす可能性を有しているため、人間らしく生きるために他の教科や活動を支える「基盤教科」として位置づけることを示した。